図書室担当者の自主研修

山口　直比古

1．はじめに

病院で診療を行う医師や医療従事者には、それを後ろから支えている数多くの職種の人々がいます。栄養士や病院事務で働く人々も広くは医療に貢献している事になります。また、現在の医療は多くの情報に支えられています。適切な情報を手にしないでは、医師は診療を行う事ができません。この情報を介して医療に貢献する事が病院図書室担当者の最も大きな責任です。我々医学図書館員は、広い意味で医療に貢献する医療従事者であるといってもよいと思います。図書館員としての仕事を通して、人々の健康に貢献しているのだ、という自覚を持つ事が大切です。それでは、医師や医療従事者のよきアドバイザー、よきパートナーとなるためには、どのような事が必要なのでしょうか。この事が、今日のお話の主たるテーマである訳です。

図書館はサービス業です。したがって図書館員というのは、図書館員としての仕事、つまりサービスをして利用者に喜ばれるという、非常に得な商売であるともいえます。世の中には、仕事をして嫌われるという損な仕事をしている人がたくさんいます。それに比べれば、図書館員という仕事は本当にやりがいのある仕事であると思います。それだけに、役に立つ図書館員でなければなりません。

図書館員に専門性はあるのか、という事が問題になっています。確かに、図書館の仕事の中には専門的な知識が無くとも誰にでもできる仕事がたくさんあります。しかし、多くの知識や経験を持たなければ処理できない問題もまた数多くあるのです。役に立つ図書館員というのは、多くの知識や経験を持って、それを仕事に生かせる図書館員の事であると私は思います。そうした意味で、図書館員の専門性は十分にあると思います。では、こうした図書館員の専門性を獲得し、維持してゆくにはどうしたらよいのでしょうか。それが、自主研修すなわち勉強する事であると私は思います。

図書館員の専門性を維持してゆく上で大切な事が幾つかあります。特にこれからの図書館員に必要な条件として、アメリカなどの先進的な国では、最近三つの事がいわれています。まず、Researchつまり研究のできる事、つぎに問題解決能力のある事、そして生涯にわたる継続教育です。Researchのできる事というのは図書館員としての仕事の質を向上させるための調査研究ばかりではなく、研究開発のできる事もさしています。事実、図書館員の開発したコンピュータシステム、たとえばペーパーチェイスのような文献検索システムがアメリカの病院を含む多くの図書館で動いています。次の問題解決は、図書館にとっては最も基本的な課題で、利用者の問題を解決してあげるのが図書館員の仕事な訳です。そのためには、図書館資料に関する知識ばかりではなく、利用者の求めるものを、インタビューを通して的確に引き出す能力も養わなくてはなりません。こうした問題解決のための能力を高める事が、これからの図書館員にとって益々重要になると考えられているのです。これまで私たちは、問題解決という視点すら持っていなかったのではないか、と私などは反省しております。これらのResearchのできる条件、問題解決のための能力を高めるための条件を作っている

やまぐち　なおひこ：浜松医科大学附属図書館

山口直比古氏

のが継続教育である訳です。今日のテーマであります自主研修というのも、実はこの継続教育なのです。もっとも、図書館員としての経験が浅くて、初歩的な勉強から始めなければならないと考えている方もいらっしゃるかもしれませんが、図書館員でいる間はずっと勉強し続けなければならないのだ、という事をいいたい訳です。勉強をし続けなければ勤まらない職業であると思います。残念ながら、私は、図書館員以外の仕事をあまりした事がないのですが、他の多くの職業でも同様な事がいえるのかもしれません。

では、なぜ勉強しなければならないのか、何を勉強したらよいのか、どのように勉強したらよいのか、という点について私なりの考えを述べさせていただきたいと思います。

2．なぜ勉強するのか

正面きって、なぜ勉強しなければならないのか、と聞かれますと、実は返事に困ってしまいます。さきほども申し上げましたように、広い意味で医療に貢献するために図書館員としての仕事の質を高めるため、としか答えようがないからです。しかし、この答えはあまりにも抽象的で、いまひとつ説得力に欠けるような気がいたします。私自身は図書館員としての仕事をする事と勉強する事とを切り離しては考えていません。勉強も仕事のうちであると考えております。ちょうど単行本の目録をとるのと同じように、仕事の一部として勉強をするのだと考えております。ですから、なぜという事はあまり考えた事がありません。勉強をするのが図書館員としてあたりまえの事だからです。よく、仕事が忙しくて本や雑誌を読む暇がない、という話を聞きますが、本や雑誌を読む事も仕事の一部であると考えれば、なんとか勤務時間内で時間をやりくりする事ができるのではないでしょうか。もちろん、大事なほかの仕事をほおっておいて本や雑誌をよむ事は差し支えがあると思いますが、多くの病院では一人で図書館を切り盛りしている訳ですから、時間のやりくりはつくのではないでしょうか。なんとか時間をつくり出してほしいと思います。もちろん、自宅で勉強する事もいっこうに差し支えないのですが、職場で本を読んではいけないと考える必要はないと思います。勤務時間内に勉強する事はまかりならん、という上司のいる職場もあるのではないかと思います。不幸としか言い様がありませんが、そうした場合には仕事の質で勝負するしかありません。良い仕事をする事で利用者に喜んでもらい、そのためには勉強が必要な事を徐々に認めてもらうしかないでしょう。

アメリカのEstelle Brodmanという人は、我々医学図書館員がなぜ勉強をしなければならないのか、という事について、五つの理由をあげています。まず、知識欲を満たす事。これには知識欲を持っているという前提条件がある訳ですが、仕事の上で知りたいと思っている事は誰にでもあると思います。また、やり終えたという満足感を得る事は、勉強ばかりでなく、仕事をする上でもとても大切な事であると思います。二番目として、世の中の変化に合わせて、時代にかなった判断基準を持つため、という事をあげています。冊子体の二次資料しか無かった時代では、文献調査といえばIndex Medicusや医学中央雑誌を調べる事であった訳ですが、現在のように、オンラインやCD-ROMによる検索手段が登場してくると、どのような調査を行う場合には、どんな手段を用いるのがもっとも適切なやり方であるのかを、我々は判断できなければなりません。三番目として、広い視野を持つため、という事をあげています。図書館の中だけの狭い視野では、世の中の事や利用者のニーズを捕えきれない、という事でしょうか。四番目として、仕事の上でのリスクを避けるためという

事をあげています。知らなかったために利用者に迷惑をかける、という事は我々が日常犯しがちな過ちのひとつです。日本消化器内視鏡学会雑誌とGastroenterological Endoscopyが同じ雑誌である事を知らずに、図書室で所蔵しているにもかかわらずないと回答してしまった事はありませんか。医学中央雑誌ではGastroenterological Endoscopyの方を雑誌名としていますので、Gastroenterological Endoscopyと書かれたメモを持ってくる利用者は多いと思います。Brodmanは最後に、その分野での好奇心を引き出すため、という事をあげています。知れば知るほど興味も沸いてきて、ますます勉強する意欲がかきたてられる、という事は私にも経験があります。

以上の五点はいずれも、もっともな指摘であると思います。図書館員の勉強というものは、いずれにしても仕事と密接に関連しており、日常的に仕事の一部として仕事の中に取り込んでする事が肝心であると思います。

3．なにを勉強するのか

次に、では一体なにを勉強したらよいのか、という事が問題になります。図書館員の仕事に必要な知識というものは、非常に幅広く、なんでも知らないよりは知っている方がよいという事がいえます。というと、まるでクイズ番組の参加者のような百科事典的な知識が必要なのかという事になってしまいますが、一番大切なのは、図書室にある資料に関する知識である事はいうまでもありません。例えば、ある事について調べるためには、どの資料を調べたらよいのか、というような事です。また、より広い視野での情報の流通や消費についての情報学的な知識も必要でしょう。これは、情報の生産者であり消費者でもある利用者について知る、という事でもあります。さらに、医学という主題分野についても、医師と会話できるだけの知識があるとよいでしょう。もちろん、我々は医師ではありませんので、医学用語というものについての知識、例えば、MeSHをできるだけたくさん覚えておくというような事になります。語学、特に英語も出来るとよいですね。英語の雑誌のタイトル、例えば、Annals of Internal Medicineという雑誌は日本語では内科学紀要というような意味になるのですが、これがわかれば、この雑誌は内科学についての論文が掲載されている雑誌であるという事を知る事が出来るわけです。

このように、非常に多くの知識が、我々医学図書館員には求められているのです。もちろん、一度にあれもこれも、という訳にはゆきませんので、少しづつ、一歩一歩積み重ねて行く事が大切な訳です。この時に大事なのは興味を持って学ぶ、という事です。別の言い方をするなら、問題意識を持って仕事をする、という事になります。看護学の分野などではよく「気付き」という言葉を使います。仕事をより良くする上で、改善すべき問題点などに気付く事をいいます。気付きから、問題の解決へと進んでゆく訳です。このような事は、問題意識を持って仕事をしていなければできない事ではないでしょうか。問題意識は、持てといってもなかなか持てるものでもありません。問題意識を持てるようにするには、注意深く仕事をするように心掛けるとよいと思います。そして、いつも「なぜ」という疑問を自分に投げかけるようにするとよいのではないでしょうか。例えば、図書の分類をする時などは、なぜそこに分類するのかを考えながら仕事を進めると、様々な問題点のある事がわかってきます。

ところで、そんな事が自分にもできるだろうか、という不安はみなさんの中にもあると思います。問題意識を持つと言うと、いかにもおおげさな感じがいたしますが、要は興味を持った事について調べてみるという事が基本であると思います。ここで、私自身のお話を少しさせていただきたいと思います。私は最近、医学図書館という雑誌に「科学コミュニケーションと論文のRetraction」という論文を発表させていただきました。これは、ある日、図書館のカウンターにすわっていて新着の雑誌の目次をながめている時に、イギリスの雑誌におもしろそうな論文が掲載されていたのを発見したのがきっかけになっています。その論文は「文献を引用する前に」というようなタイトルだったのですが、その論文を読んではじめて、論文の撤回を表すMeSH, Retraction of Publicationのある事を知りました。ちょうどその頃、科学研

究における不正行為についても興味をもっていましたので、不正行為の発覚により論文の撤回のおこなわれる事のある事を知ったのは、驚きでもありました。そこで、まず、論文の撤回の実態について調べてみようと思い立った訳です。そして、実際に雑誌に掲載された論文撤回の記事を読んでいると、ある側面からみた科学コミュニケーションの一面が見えてきた、という訳です。

アメリカやイギリスの雑誌には我々医学図書館員が興味を持てる記事がたくさん掲載されています。私は、暇を見て、なるべく目次に目を通すようにしておりますが、思わぬ発見をする事がしばしばあります。Natureという雑誌には、よく日本の科学技術研究の実態を報告したニュースが掲載されますし、Scienceという雑誌には科学研究における不正行為についての連載記事が掲載された事もありました。NatureやScienceは基礎科学の雑誌ですので、所蔵していない病院の方が多いかもしれません。しかし、Index Medicusにはわれわれの仕事に密接に関連したMeSHがたくさんあります。LibrariesやInformation ServicesなどのMeSHです。図書館の利用者がよくやるような文献調査は、Index Medicusを用いて我々もできるのです。ぜひ、やられるとよいのではないかと思います。

もうひとつ、私自身の事で恐縮なのですが、私は、ここ5－6年ほど「学会発表情報の性格と役割」というテーマでいくつかの調査をしてまいりました。一年間に日本国内の医学関連の学会だけで10万件余りもの口頭発表が行われているのですが、これは膨大な量の情報な訳です。しかし、あまり引用もされず、本論文となる割合も欧米での調査では2－3年で50%という結果が出ておりますので、残りはそのまま消えてゆく訳です。こうしたたぐいの情報も図書館の中には日々入ってくるし、利用されている訳です。学会発表抄録が医学中央雑誌に収録されているし、オンラインで検索できる事はみなさん御存知と思います。しかし、私は、現に論文を書く場合、学会発表は一症例とは数えないよう指導している教官を知っておりますし、利用者自身の中にも本論文とは明らかに異なった扱いをしている人々が多くいる訳です。では一体、この学会発表情報の図書館における情報としての役割とは何なのかという素朴な疑問が、そもそもの私の調査の発端であった訳です。今年に入って、学会発表の本論文となる割合についてのアンケート調査を行いました。実際に学会で口頭発表を行った研究者に直接アンケート用紙を郵送するという方法で、およそ1000人を対象として行いました。その結果につきましては、次号の医学図書館に掲載される予定ですが、こうした調査を通じていくつかの事を学びました。それは、私は一介の図書館員にすぎませんが、その図書館員でもかなりの調査ができるという事と、多くの研究者が図書館の活動に興味を持っているという事を知る事ができた、という事です。たくさんの反響がありましたし、励ましもいただきました。なにか調査をしたいが、自信がないという方もいらっしゃるとおもいます。恐れる事はありません。こちらが真剣にやれば、相手にも調査の目的や意図など理解してもらえますし、調査もうまく行きます。つたない経験ではありましたが、私は、やればできるものだと実感いたしました。

大切なのは、興味を持っている事であると思います。つまらないと思ってやっている事は、なかなか身に付きません。

4．どうやって勉強するのか

では、一体どうやって勉強したら良いのか、という事に皆さん一番興味をお持ちだろうと思います。本日のテーマは自主研修となっておりますが、自主という以上一人でやるという事が基本であろうと思います。実際、一人で仕事をなさっている方が多い訳ですが、勉強の方も一人でやるのは、事実大変苦労いたします。勉強は基本的には自分でやるものです。ですから、自分で好きなようにやればよいのですが、一人でできる事にはおのずから限界があります。そこで、研修会へ参加するという方法があります。

まず、自分一人でやる場合ですが、これは本や雑誌を読む事が中心になるだろうと思います。「ほすぴたるらいぶらりあん」や「病院図書室」にはぜひとも目を通していただきたいと思いますし、できたら「医学図書館」や「薬学図書館」に

も目を通していただきたいと思います。先日発行されました近畿病院図書室協議会の会報には、新人のために病院図書室の仕事を簡潔にまとめたマニュアルが掲載されておりまして、これは大変に役立つものであると思いました。こうした図書館専門の雑誌ばかりではなく、図書を整理する時には目次や前書きのページに目を通し、雑誌を受け入れる時にも目次に目を通していただきたいと思います。先程も申し上げました通り、我々医学図書館員に興味の持てる論文の掲載される事がしばしばありますし、なによりも、今医学の各分野でなにが問題になっているのかを知る事ができます。仕事として、雑誌特集記事案内などを作っておられる病院もあるかと思います。これなども、たいへん良い勉強になります。新刊の案内に注意を向ける事も図書館員として大事な仕事の一つです。特に、参考図書の出版や改版には普段から気を付けていなければなりません。雑誌の後ろのページの広告欄にはこうした案内がたくさん掲載されています。こうした事も、広い意味で勉強の一つになります。

先程も申し上げた通り、一人でできる事にはおのずから限界があります。また、一人でやっておりますと、どうしてもひとりよがりといいますか、違った観点からものを眺めてみるという事が出来にくくなります。そこで、ほかの病院の仕事仲間と話をする、という事がたいへん大切になってまいります。病院図書室担当者のための研修会が幾つかありまして、そこへ参加する事が大変役に立ちます。先程紹介いたしました近畿病院図書室協議会の会報にはこうした研修会がリストアップされておりました。本日の研修会もそうですが、日本医学図書館協会などでも、いくつかの研修会をやっておりまして、病院図書室の方も参加できるようになっております。

しかし、私はもっと大事なことは、自分たちでこうした研修会を企画運営する事であると思います。本日は静岡県の方が大勢参加されておりまして、私の方から紹介するのもいささか僭越なのではありますが、少し紹介させていただきます。静岡県には静岡県医療機関図書室連絡会という組織がございまして、年に二回研修会を開催しております。主として浜松医大の担当者が講師になりまして、実習を含めた研修を行っております。これまでに、製本や相互協力、二次資料の使い方、引用文献の読み方といったようなテーマで研修を行ってまいりました。毎回十数人の参加があり、非常にプラクティカルな研修をおこなっております。このほかに、浜松市内の病院の担当者によりまして、二か月に一度勉強会をおこなっております。ここでは、近畿病院図書室協議会の編集いたしました「医学資料の整理と利用－病院図書室マニュマル」という本をテキストにいたしまして、輪読と質疑応答をおこなっております。毎回10ページ程度しか進みませんので、現在ようやく半分程度まで読み進んだところです。こういった研修が、実際に仕事をする上では役に立つのではないかと思います。さらに、東海地区医学図書館協議会では、年に数回研修会をおこなっておりますが、病院図書室にも案内を出し、毎回何人かの参加者を得ております。こちらの方は、少し規模の大きな大学の医学図書館の研修会でありますので、内容も多少異なっております。例えば、最近ですと、CD-ROMの話や医学知識に関する易しい講義がおこなわれております。

こうした、地域での研修会や勉強会を自分で作る事が必要であると思います。現在、北海道や栃木県でも病院図書室の地域ネットワークが形成されていますが、こうしたネットワークの機能は基本的には二つあり、一つは相互協力ですが、もう一つは研修機能であると思います。とくに、地域内の大学医学図書館を巻き込んでの研修は、大変有効であると思います。私は、浜松へ来る前は北海道の旭川医大という所にいたのですが、北海道のネットワークは実は、旭川市の四つの病院の担当者が集まったところから始まっております。本日は、全国の病院から参加されておりますが、まず、自分の町で病院図書室担当者の横の繋がりをつくり、お互いに苦労話をする所からネットワーク作りを始めていかれたらいかがでしょう。地域内の大学医学図書館の果たすべき役割は大変に大きいので、次に、大学図書館の担当者とコンタクトをとる事をお勧めいたします。大学医学図書館の果たすべき役割は単に資料的な面での援助ばか

りではなく、人的な援助という面もあります。北海道のネットワークであります北海道病院ライブラリー研究会は病院図書室研究会と同様、個人の自由な集まりであり、機関加盟といった組織だったものではないのですが、年に二回開催される研修会には毎回札幌医大や北大医学部の担当者が参加しているようであります。地域の中では、大学医学部図書館を大いに利用すべきでしょう。知らない事は尋ねるというのが、知識習得の早道でもあるのです。

勉強をして、次に大切なのが書くという事です。仕事のうえで興味を持ち、調べたりアンケート調査を行っただけでは、自分にとってはある程度仕事に役立つかもしれませんが、全体としての図書館情報サービスの向上にはつながりません。まとめて書いてみますと、自分ではっきりと理解出来ていない部分や、なにがわからないのか、がわかってきますし、自分の得た知識を仕事の仲間で共有する事にもなります。書くという事は、制約も多く、なかなか大変な作業でもある訳ですが、一連の調査研究は、書く事によって完結すると思います。一人でも、あるいは、グループでも、なにか調査研究などを行った場合にはぜひともそれを論文にまとめて発表していただきたいと思います。論文を書く所までゆかなくとも、栃木県のネットワークで出しているニュースで「とみねっと」というのがあるのですが、仕事上の様々な問題などが提起されていたりします。こうした簡単な文章でも、書くとなれば大変なのですが、独り言のように書き連ねてゆく事も、仕事上の問題点を整理する上では大変に役に立ちます。ぜひ、書くというトレーニングも積んでいただきたいと思います。

5．ま と め

今日お話させていただいた事をまとめてみますと、まず、病院図書室担当者の仕事は、広い意味で医療に貢献する事であるという事であります。そして、そのための勉強は仕事の一部であるという認識を持っていただきたい、という事であります。つぎに、興味を持って勉強していただきたい、あるいは問題意識を持って仕事をしていただきたい、という事を申し上げました。一人で勉強する事も大切ですが、仲間をつくって、みんなで問題解決にあたったり、研修を行う事をお勧めいたしました。そのために、大学の医学図書館をおおいに利用してください。また、書くという事も重要である、という事も申し上げました。知識を分け合い、共有しましょう。

最後に、もう一言だけ、お話したい事があります。それは、理想を持っていただきたい、という事であります。自分はどんな図書館員になりたいのか、どんな図書室をつくりたいのか、そういった理想を持っていただきたいのであります。日本では、理想を口にする事はとかく非現実的であるとしてしりぞけられてしまいがちですが、私は、理想を持ってさえいれば、なにをやっても、またどんなふうにやっても、必ず身に付くものであると思います。